

症性疾患であるが、男性での報告は少ない。今回、男性に発症した乳輪下膿瘍の症例を経験したので報告する。症例は 40 歳男性。1 週間前より左乳頭下の有痛性腫瘤を自覚し、近医より紹介となった。左乳輪下から傍乳輪皮下の皮膚瘡赤を伴う硬結を認め、圧痛も認められた。超音波検査では乳輪下に内部不均一な低エコー腫瘤を認め、内容は流動性のエコー像を呈し、膿瘍の所見と考えられた。穿刺にて内容が膿であることを確認、穿刺ドレナージ施行し、抗生剤 (CFPM) 投与開始した。MRI では、左乳頭下の辺縁が不均一に造影され、内部壊死を伴う腫瘤性病変を認め、膿瘍の所見であった。悪性疾患合併の可能性を否定するため、針生検を施行したところ、炎症細胞浸潤を伴う肉芽性変化、膿瘍形成を認め、悪性所見は認められなかった。治療開始 4 週間後に切開排膿を要したが、その後は膿瘍の縮小を認め、再燃は認めていない。男性乳輪下膿瘍の報告は非常に稀であるが、乳輪下膿瘍は乳癌との鑑別が問題になり、今回の症例から男性乳輪下膿瘍においても超音波検査、MRI は乳癌との鑑別に有用である可能性が示唆される。また乳輪下膿瘍の発症に喫煙が関与するという報告があるが、本症例でも喫煙歴を有し、喫煙が増悪因子である可能性が示唆される。

4. 針生検により発生した腋窩仮性動脈瘤の一例

森下亜希子¹、宮本 健志¹、藤澤 知巳¹
小林 倫子²、堀越 浩幸²、飯島 美砂³
松木 美紀⁴、柳田 康弘¹

- (1 群馬県立がんセンター 乳腺科)
- (2 同 放射線診断科)
- (3 同 病理部)
- (4 同 看護部)

【症 例】 66 歳女性 【主 訴】 右腋窩腫瘍 【現病歴】 3 か月前より右上肢の浮腫があり、さらに右腋窩腫瘍を自覚したため、近医を受診、当院紹介受診した。【経 過】 画像検査では右腋窩に多数のリンパ節腫大を認めたが、右乳腺内には異常を認めなかった。右腋窩リンパ節より針生検を施行した際に動脈性の出血を認めた。そのため、圧迫止血を 10 分施行し、止血を得たが、さらに 10 分圧迫止血をし、圧迫固定をして帰宅とした。次の受診時には乳房から腋窩の皮膚変色を認めたが、腋窩腫瘍の状態は不変であった。右潜在性乳癌の診断にて術前化学療法施行、右腋窩リンパ節の著明な縮小を認めた。手術前に MRI を施行、右腋窩に仮性動脈瘤を認め、その 1 週間後に CT を施行し、1 週間で増大を認めたため、緊急手術となった。仮性動脈瘤切除と乳房切除、腋窩リンパ節郭清を施行した。【考 察】 本症例は針生検が原因で仮性動脈瘤が発生した。化学療法により周囲の腋窩リンパ節が縮小することで動脈瘤が増大したと思われる。腋窩腫瘍に対する針生検は周囲血管を確認しながら施行する必要があると考えられた。

〈セッション 2〉

【診断：悪性】

座長：森下亜希子（群馬県立がんセンター 乳腺科）

5. 浸潤性乳管癌と浸潤性小葉癌が同一腫瘍内に認められた 1 例

山岸 陽二^{1,2,3}、山崎 民大²、守屋 智之²
桂田 由佳³、津田 均³、上野 秀樹²
山本 順司²

- (1 自衛隊中央病院 外科)
- (2 防衛医科大学校 外科)
- (3 同 病態病理学講座)

【諸 言】 同一病巣内に浸潤性乳管癌 (以下 IDC) および浸潤性小葉癌 (以下 ILC) を認めた 1 例を報告する。【症 例】 75 歳、女性。主訴：左乳房腫瘍。現病歴：平成 27 年 11 月に乳房腫瘍自覚し近医受診。乳癌が疑われ当院紹介受診。既往歴：4 年前胃癌手術。乳癌リスク：母親 乳癌。初診時現症：左 A 領域に 1.5 cm 大の可動性良好で弾性硬の腫瘤を触知。腋窩リンパ節腫大なし。マンモグラフィ所見：左内下に 15 mm 大のスピキュラを伴う不整形腫瘤を認め、乳頭方向への索状影を認めた (C-5)。超音波所見：左 AB 領域に 14×8×7 mm 大の境界明瞭粗造な低エコー腫瘤を認めた (C-4)。MRI 所見：左 A 領域に rapid-wash-out パターンを呈する 9 mm 大の不整形な腫瘤を認めた。PET-CT 所見：原発巣の同定は困難。針生検：IDC、ER 陽性、PgR 陰性、HER2 スコア 1+。手術：Bt+SN。SN は陰性であった。病理所見：断面では左 A 領域に不明瞭な 13 mm 大の白色調腫瘤を認め、組織学的に腫瘤に一致して硬癌の像が認められた。硬癌の尾側から外側にかけて 30×17 mm の範囲に ILC を認めた。二つの成分の境界は明瞭で、各々が領域性を持って分布しているものの、1 つの腫瘤を形成していた。E-cadherin は IDC では陽性、ILC は陰性であった。全体として ILC 成分が優性であった。WHO 分類では Carcinoma of mixed type (mixed invasive NST and lobular carcinoma) に相当した。【まとめ】 同一腫瘍内に IDC および ILC を認めた 1 例を経験した。画像および病理所見、遺伝子学的所見を供覧し、文献的考察を加えて報告する。

6. 副乳癌が疑われた HER2 陽性腺管癌の 1 例

坂本 真希¹、上田 重人¹、島田 浩子¹
廣川 詠子¹、杉谷 郁子¹、山口 慧¹
貫井 麻未¹、竹内 英樹¹、高橋 孝郎¹
大崎 昭彦¹、長谷部孝裕²、佐伯 俊昭¹

- (1 埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科)
- (2 同 病理診断科)

【症 例】 58 歳女性、右上腕皮下腫瘍 【現病歴】 2 年前